

学会ホームページ <http://jasce.jp>

060号 (2021年4月18日)

目次

- 第17回全国大会の概要
- 会員情報の変更届
- 年会費納入のお願い
- 『協同と教育』への投稿募集中
- 第3回「オンライン協同学習カフェ」報告
- 第1回「トレーナー研修会」報告
- 各地の研究会・勉強会
- 出版情報
- 特集「令和の日本型学校教育」
- ショートレター(会員からの投稿記事)

第17回全国大会の概要

第17回大会を2021年10月23日(土)～24日(日)にオンラインで開催します。2日目の午前にはシンポジウムを開催します。みなさまの参加をお待ちしています。

1. 大会テーマ

「令和の日本型学校教育」と協同教育

2. 大会日程

1日目:2021年10月23日(土)

2日目:2021年10月24日(日)

3. 開催方法

Zoomを用いたオンラインで開催します。オンライン・ミーティングへの参加情報は大会参加申込み後に連絡します。

4. 発表形式

口頭発表(研究発表と実践報告の2タイプ、発表20分質疑10分)

ラウンドテーブル(120分。ただし

90分・180分も設定可能)

5. 発表申込募集期間

開始日 2021年4月26日(月)

締切日 2021年7月5日(月)

発表申込みには年会費を完納している必要があります。

非会員の方が新たに会員となり発表を申込みの場合は、6月30日(水)までに入会申込みと年会費入金が必要です。

6. 参加申込期間と大会参加費

受付開始日 2021年4月26日(月)

受付締切日 2021年10月8日(金)

参加費 5000円

大会参加には事前の申込が必要です。当日の受付はできません。ご注意ください。大会参加費は会員・非会員の別はなく一律です。大会参加費の振込口座は学会ホームページで、別途お知らせします。(右側の年会費の振込口座とは異なります。)

7. 大会参加者専用サイト

参加者専用のサイトを開設します。

第17回大会実行委員長 高旗浩志

会員情報の変更届

年度がわりの異動や転居などともなっていて、所属・住所・メールアドレス等の変更があった場合、すみやかに会員情報変更をお願いします。届け出は学会ホームページの「会員情報変更フォーム」から随時可能です。
(<https://www.jasce.jp/php/1044form.php>)

年会費納入のお願い

本年度の年会費5,000円の納入をお願いいたします。以下の口座に振り込んでください。3年度を超えて年会費が未納となった場合、自動的に退会扱いとなりますのでご注意ください。

◇銀行振込の場合

金融機関名 ゆうちょ銀行

支店 ○一九

口座番号 (当座) 0315442

名義 日本協同教育学会

◇郵便局で「振込取扱票」をお使いの場合

口座記号・番号 00100-8-315442

加入者名 日本協同教育学会

『協同と教育』への投稿募集中

『協同と教育』第17号への投稿を受け付けています。投稿受理から査読を経て採択が決定されるまでに通常数ヶ月以上を要します。みなさまの積極的な投稿をお待ちしております。

第3回「オンライン協同学習カフェ」報告

2021年3月6日(土)に第3回「オンライン協同学習カフェ」を開催しました(写真)。参加者は会員28名と非会員10名の38名でした。今回は、参加者が2020年度の授業実施で工夫したことや困ったことを持ち寄り、相互の経験から学び考えることを趣旨として開催しました。

まず、織田千賀子先生(藤田医

JASCE



科大学保健衛生学部)による「バーチャル体験と看図アプローチを活用した成人看護学の学内実習展開の試み」として話題を提供していただきました。ICTと看図アプローチを活用して学習者が協同的に学びを深くする授業デザインでした。制限のある中でも工夫次第で授業を改善できると勇気づけられました。

続いて、30分のグループセッションが2回行われました。4名程度のグループごとに参加者が2020年度の授業実践を報告し、その経験から得た気づきや学びを共有しました。参加者の授業環境は多様でしたが、類似した気づきを持っていることを発見したり、自分一人では全く考えつかなかった工夫や課題を知ったりすることができました。

今回は事前に参加者に「2020年度の授業の中で工夫した・心がけたこと、困った・知りたいこと」をグループセッションのための事前個人思考

シートとして回答していただき、それを集約したものを配付しました。グループセッションでの活用だけでなく、同じグループにはならなかった参加者の取り組みや気づきも知ることができたので、カフェが終了した後も関心のある取り組みへのおたずねが行われたようです。

次回、第4回オンライン協同学習カフェの開催は9月上旬を予定しております。決まり次第、ニューズレターならびに学会HPでご案内いたします。

皆様のご参加をお待ちしております。
(野上俊一)

問い合わせ先：研修委員会
(kenshu@jasce.jp)

第1回「トレーナー研修会」報告

昨年ベーシックテキストを改訂したことに伴い、2021年3月13日(土)に第1回「トレーナー研修会(Zoom)」を開催しました。主に改訂内容の理解と技術力向上のための研修会でし

た。学会認定トレーナーと研修委員、合わせて18名が参加し、スライドに示した内容で研修を行いました。

第1回 トレーナー研修会

- | | |
|---------------------|----------|
| 1. 研修会の流れ説明 | 5分 |
| 2. 簡単な自己紹介 | 5分 |
| 3. 新テキストについて | グループ 50分 |
| ①理論編2：協同学習の特長 | |
| ②理論編4：3つの定義 | |
| ③その他 | |
| 4. オンラインワークショップについて | グループ 20分 |
| 5. 全体交流 | 10分 |

現時点ではまだ、対面でのワークショップ開催が難しい状況ですので、オンラインでのワークショップ開催も念頭に置き、たくさんの意見をいただきました。これらの意見をもとに、研修委員でオンラインワークショップについても検討していきます。

学会主催の対面でのワークショップ(ベーシック・アドバンス・マスター)を心待ちにしてある方もいらっしゃると思います。実施可能な状況になりましたら、改めて開催計画をご案内いたします。(須藤 文)

問い合わせ先：研修委員会
(kenshu@jasce.jp)

各地の研究會・勉強會

(大阪地域)

協同学習を用いた看護教育研究会

◇3月28日(日)14:00~17:30
オンラインでの開催に37の方が(関東・中部・関西・九州・沖縄から)参加されました。講師に南山大学名誉教授の石田裕久先生をお迎えして、テーマ「自己教育力を育む評価活動～評価表をつくる～」について、講義、グループディスカッション、全体討議を繰り返しながら学習することができました。また、今回の研究会には

JASCE



理事の和田珠美先生（中部大学）も参加してくださり、大変心強いサポートをしていただきました。

石田先生は2018年3月に、今ではとても懐かしく貴重に思える「対面による3密」の会場で「協同学習と評価」の勉強会をご担当いただき、今回は2回目となりました。前回、大変インパクトがあった「夕張メロンの品質管理」のDVD視聴が今回も組み込まれていました。生産者から集まってきた夕張メロンを、検査員が色・網目・つや・音から、特秀・秀・優・良を判断して振り分けていきます。この検査員は生産者同士で担うシステムになっており、夕張メロンの規格品質を高め守るために生産者同士が内側で厳しく評価し合う一方、良いメロンを生産するための情報を生産者同士が惜しみなく伝えあって共有する場も設けられていました。この夕張メロンのブランドを共有財産にしていく取り組みを通して、評価とは何のための評価なのか、教育評価のポイントとして、(1) 評価は本来「自己評価」であること、(2) 何のために評価するのか、その目的によって評価方法は異なる、という2点について具体的に学ぶこと

ことができました。学生を「評価される」という受け身にするのではなく「どうなれば良いのか」という教育目標の観点を学生と教師が共有することの必要性を学びました。参加者からは「前回の視聴で気がついたことと今回気づいたことが違いました。前回学んだことを自分が活かせてきているのかと思いました」という感想もありました。学んで実践して、重ねて学んで自己評価につなげられた方も多かったと思います。開催前は「評価の方法」を学びたいというニーズがありましたが、終了後は「評価の本質を学べた」、「新年度に向けて、石田先生から教育へのパワーをいただきました」という感想が多くありました。

◇新年度がスタートし、また新たな人間対人間の出会いが生まれます。コロナ感染者数の大波小波が繰り返し押し寄せる中、授業方法が変化しますが、学生たちにとっては1回毎の授業がどれも大事です。2021年度も教師自身の進歩・成長を図り授業に反映できるよう、協同学習を実践する仲間と共に夕張メロンのように高め合っていきたいと思います。2021年度も5月・7月・9月・11月・1月・3月に、コ

ロ禍収束までオンラインで開催します。
連絡先：緒方巧（梅花女子大学
t-ogata@baika.ac.jp）

きょうどう探究型授業づくり研究会 (きょう探研)

◇3月21日(日) 第2回「きょう探研」を開催しました。(写真) 第2回ですが実質的には初開催です。この会は参加者相互の対話によって、それぞれが新たな気づきを得て高まり合うことを目指しています。参加された先生方は授業改善や学力向上等で学校の先頭に立つ意欲のある先生が中心で、まさに精鋭メンバーでした。



今回の話題（テーマ）は「どのようにしたら協同学習の成果（深まり）を実感（評価）できるのか」ということです。このテーマは参加予定者から事前にメールで伺っていた実践上の悩みや関心事の中から決めたものです。日常の問題を扱うことで、「自分事」としてテーマを捉え、解決しようとするプロセス（探究）がうまれると考えました。

話し合いは、「頭の中で考えていても、それをうまく表現できない児童生徒はどう評価するのか」等の論点で活発な意見のやり取りがなされました。話し合い後の参加者の満足度はとても高く、満点以上の評価をつける参加者もいました。この高い満足度は、共通する課題や悩みを持つもの同士が真剣に向き合い対話を続けたことにより、それぞれの自己認識が高まった

JASCE

からではないかと思えます。「お互いに高まり合う」そんな会をこれからも目指していきたいと思えます。

連絡先：中村哲也（常磐会学園大学 nani7272@yahoo.co.jp）

（岡山・中国方面） 協同学習研究会

◇今年度最後となる第3回の協同学習研究会を2月27日（土）午後2時～5時30分にオンラインで開催しました。今回は日本協同教育学会・元会長の関田一彦先生（創価大学）に、協同学習の技法に関するご講話と演習をお願いしました。本会はこれまで「協同学習の理念の実現を目指す授業者の実践に学ぶ」ことを中心に開催してきました。すなわち「協同」の理念に支えられた骨太の授業観・学力観・学習観を共有し、具体的な実践に学ぼうとしてきました。逆に言えば、協同学習を単なるグループ学習と狭く捉え、安易な「ノウハウ」をなぞるだけの研究会に陥ることを避けてきました。その一方で、「深い理論的思索に裏付けられた実践技法」を学ぶ機会を提供することも、本会の重要な使命と考えています。大切なことは、授業者一人一人が協同学習の理念の実現を目指し、自らに必要な実践技法を生み出すことにあります。その手がかりを得る研究会となりました。

◇令和3年度の研究会は、6月12日、8月28日、12月4日、令和4年3月5日に行います。いずれも土曜日の午後2時からです。当面はオンラインで開催します。発表をご希望の方は高旗（takahata@okayama-u.ac.jp）までお知らせください。

連絡先：高旗浩志（岡山大学教師教育開発センター

takahata@okayama-u.ac.jp）



（福岡・九州方面）

協同教育研究会（旧・授業づくり研究会）

◇「授業づくり研究会」から数えて第51回目にあたる「協同教育研究会」を、2021年2月27日（土）の午後、14時から17時の間、Zoomで開催しました。今回の事前登録者は52名でした。Zoom開催に変わってから、これまで以上に、全国各地から、高等教育関係者を中心に、参加者が増えてきました。それに応じて参加者の所属と専門はさらに多様化しています。当日の参加人数は、途中での出入りがありましたので、明確ではありませんが、瞬間最大数は41名でした。また、情報交換会にも多くの皆さんが参加されました。

参加者は、まず導入として、Zoomの「ブレイクアウトルーム」を用いた仲間づくり（自己紹介）を体験しました。そこで仲良くなったブレイクアウトルームのメンバー（グループ）をそのまま生かして、2つの講演（オンライン授業体験）を行いました。

今回は次の2つの講演をお願いしました。

1つめの演題は「授業通信を通して考える初回授業の大切さ」。講師は須藤文先生（久留米大学）。初回授業後の学生のふり返りをもとに作成した授業通信を「課題文」とし、「関連づけ」（「LTD話し合い学習法」のステップ5・6）をグループ内で交流しました。

2つめの演題は「高等学校国語科において求められる資質・能力を育てるための授業づくり」。講師は水野正朗先生（東海学園大学）。詩「ジーンズ」を参加者一同で共同解釈する授業体験を通して、多様なテキスト解釈を巡って個人思考と集団思考がどのように組織され、発展していくかを考えました。

ふたつのオンライン授業体験で共通して印象に残ったのは、自分とは異なるさまざまな解釈や意見に出会って関連づけることの奥深さ、対話の楽しさでした。なお、オンライン授業における協同学習の実践方法についての意見交換もなされ、充実した時間を過ごすことができました。

連絡先：協同教育研究所「結風」office@yasunaga.me

JASCE

特集

令和の日本型学校教育

2021年、中央教育審議会はこのからの日本型学校教育について答申をまとめました。その中で、個別と協働の一体化が求められました。社会の変化に対応するコンピテンシーを伸ばし、個別最適化して学習効率を上げることが期待されています。しかし、何のために学ぶのか、何のための協働するのか、という問いへの答えは怪しげです。政策的には、Society5.0を措定し、そこで描かれる社会に適応するための学校教育が描かれています。それは本当に人々が、子どもたちが求めている社会であり、教育でしょうか。

学習の個別最適化を目指すことで認知面の向上は促進されるかもしれませんが、誰もが同じように成績優秀になるわけではないでしょう。社会的、経済的格差は学業成績だけでなく、価値観や人生観にも影響しています。2040年にはAIが最適な進学先を選定し、大学入試はなくなるのでしょうか？AIによる適性診断が、選抜という競争システムに置き換わり、競争する前に決着がついている、という時代になるのでしょうか。ビッグデータを使って過去の事例から統計的に尤もらしいパターンを抽出し、それが最適であると押し売りするような「個に応じた指導」が蔓延する心配はないのでしょうか。大切なのは、自己決定を支える主体の育成だと私は思います。人は自身の進路を自己決定したいと思うでしょうし、そうした思いは内発的動機付けの核にあるものではないでしょうか。

少し飛躍しますが、学校教育の目的は、様々な教科内容の学習を通じて、子どもたちがより善い人間になっていくのを援けることではないでしょうか。日本では、義務教育の目的の一つに「協同」の精神の涵養が謳われています。協働はプロセスですが、協同は目的です。

協働教育は相互に学びあい高まりあう学習活動／学級・学校生活を通じて、共に生きることのすばらしさと難しさを学び、その学びを糧に生きようとする価値観・人生観を養うことを目指します。そして、協同学習は、学び合うことで互いのズレを乗り越えた「わかる喜び・わかり合う喜び」、誰かの理解・成長に貢献できることへの喜び、そして共に成長している実感から、さらに明日に向かって高まりあおうとする意欲を生み出します。こうした協同教育の視点に立てば、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないように「協働的な学び」を充実させる、という捉えは手段と目的の混同のように感じられます。

(創価大学 関田一彦)

第17回大会(10月24日)シンポジウム

令和3年1月26日の中教審答申『『令和の日本型学校教育』』の構築を目指して-全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協

働的な学びの実現-」のキーワードは「個別最適な学び」(個に応じた指導)と「協働的な学び」です。答申では『『個別最適な学び』』が『孤立した学び』』に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する『協働的な学び』』を充実することも重要」とされていますが、関田会員の論考にあるように、1人1台端末による個別学習に傾く懸念もあります。第17回大会でこの議論を深めていきましょう。

第17回大会では例年の講演に代えて、このテーマでのシンポジウムを企画しています。大会2日目午前中にオンラインで開催します。登壇者は以下の方々です。ぜひご参加ください。

高橋 純(東京学芸大学 准教授/教育学)

柴田好章(名古屋大学 教授/教育方法学 [授業研究])

久川慶貴(春日井市立藤山台小学校 教諭・教育学修士)

出版情報



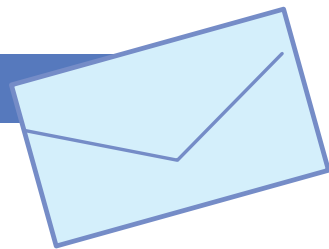
協同教育実践資料 No.25

仲間と共に課題に向き合い、自ら学ぶ生徒の育成

一課題設定・個人思考・話し合いを重視した協同学習を通して-

設楽町立設楽中学校(愛知県)は、全校生徒61名のへき地小規模学校です。長期的な人材育成を視野に入れて「協同学習」の理念を取り込んだ授業づくりを推進し、各教科に共通する設楽中学校の授業スタイルをつくってきました。本書には研究推進計画・学習指導案など実践資料が多く掲載され、実践研究の実際を知ることができます。設楽町立設楽中学校著、村松忠男・杉江修治監修。一粒書房。

学会HP「出版物案内」をご参照ください。



「空想が現実」

「空想キャンプ場」をご存知でしょうか?何とも不思議なネーミングで心惹かれてしまいますが、これは日本オートキャンプ協会が、オンライン会議システム[zoom]を使って開催したオンラインイベントの名前です。参加者が画面越しうどんをつくり、その様子をリレー中継したり、画面越しにキャンプファイヤーを囲み、「パブリカ」の大合唱をしたりするなど、双方向で楽しめるオンライン(空想)のキャンプ場イベントでした。キャンプとオンラインの融合というユニークな試みは大好評だったということです。

また「空想」といえば、忘れてはならないのが「あつ森」です。「あつ森」とは任天堂より発売されたゲームソフト「あつまれ どうぶつの森」の略で、ゲームの中で空想上の自分の無人島を作るゲームです。我が家でも娘に「あつ森」買わされました。このゲームですることは、ただくつろいで、自分自身が楽しい小さな生活を送ること。まるで現実の世界を空想化したようなゲームです。コロナ禍によって外出できなくなった世界中の人たちの間で大流行し、2020年の新語流行語大賞のトップテンに入ったことは記憶に新しいこともいます。

これ以外にも昨年はオンラインでの取り組みが数多くクローズアップされました。検索サイトで「オンライン○○」で検索すると、「オンライン会議」「オ

ンラインセミナー」「オンライン授業」「オンライン飲み会」……などたくさん「オンライン○○」がヒットしました。

大学の授業はもちろん、この協同教育学会においても「オンライン協同学習カフェ」や各地の学習会がオンラインで開催されました。私もオンライン協同カフェや岡山の協同学習研修会に参加させていただきました。本来なら遠方で開催されたはずの研修会に、部屋にいながらにして参加することができ、オンラインの有難さをひしひしと感じました。

しかし一方でオンライン・ミーティングには、コミュニケーション面でやや不自由を感じました。それは、こちらが画面上の相手を見て話していると、カメラの位置関係から相手と視線がずれてしまい、「しぐさ・表情」などが相手に伝わりにくいということです。またオンラインでは言葉のやり取りに多少のタイムラグが生じ、「うなずき・あいづち」などの双方向のやり取りが不自然になってしまうことです。「話はあるが、なかなか深まらない」という印象を受けました。

グループでの話し合いはやはり直接会っておこないたいと思う反面、グループではなく全体の場面ではオンラインはアリだなと感じました。広い会場に多くの人が集まり、司会者以外全員が同じ方向を向いて話すようなリアル研修会では、集団的浅慮や社会的手抜きが起き、なかなか意見を言えません(言いません)。しかし、オンラ

イン・ミーティングでは、比較的意見を出しやすいように感じました。画面上に司会者・指導者・参加者の顔が並び、ひとり一人と顔が向き合う形になります。お互いの顔を見ながら話すことで、自分たちは「仲間である」という意識が深まったと感じました。「仲間」に対する信頼と責任を自覚できたことが集団的浅慮や社会的手抜きを抑制する方向に働いたのではないかと思います。

とはいえ、まだまだ多くの人が大勢の前で自分の意見を出しにくい状況かもしれません。そんな時に活躍するのがチャット機能です。チャットの機能を使えば他の人とのコミュニケーションの負荷は下がり、自分の意見を表明する機会は格段に広がるのではないのでしょうか。

今回のコロナ禍で、オンラインの取り組みに触れることで、対面でないメリットをいくつも感じました。今後は、「オンラインか対面か」ではなく、「対面もオンラインも」、その両方の良い部分を取り入れていくということが、新しい「学習様式」になるのかもしれませんが。そうすると、オンラインでの授業や研修会とははや「空想」ではなく、「現実」の一部になるでしょう。

もしかすると今年は、「空想キャンプ場」という言葉はなくなり、オンラインでのキャンプもリアルキャンプの楽しみ方の一つとして浸透しているかもしれませんね。

(常磐会学園大学 中村哲也)